

中土に干鰯を雜へ植かへてよし、盆は擂盆の如く上の開きたるものよし、寒を恐る、事櫻竹よりも甚し、冬乾かして枯槁す、又水多てはわるし、加減肝要なり、むろ入前一度糞水を澆てよし、  
〔剪花翁傳三五月開花〕 櫻櫛竹 花の色赤茶、形ち少し、開花五月中旬、方三分陰地三分濕、土えらばず、肥大便塞中に入べし、分株春彼岸後よし、又秋の土用後芽を缺分植べし、同種に觀音竹といふあり、長二尺許に過ず、上品とす、育方同じ、

〔古今要覽稿草木〕 櫻櫛竹 しゆろちく

櫻櫛竹は和漢通名にて、その一名を櫻竹、一名桃竹、一名桃枝竹、一名陶竹、一名桃絲竹、一名實竹、一名木竹、一名石竹、一名蒲葵竹、一名古散竹、一名絢竹、一名桃笙といふ、此種に大小の異なるあり、其大なるを俗に大櫻櫛竹といひ、漢名を樸竹といふ、葉の狀全く櫻櫛に似て少さく、深綠色にして光澤あり、その幹また櫻櫛に似て、至て細小にして、高さ四五尺、毛多く節繁く、中心實して頗る實心竹の如し、年を経るものは、梢の葉間に七八寸の穗を抽出て、細小華をつく、狀金栗蘭華に似てや、粗なり、小なるを俗に琉球櫻櫛竹、一名觀音竹といひ、漢名を筋頭といふ、その狀大櫻櫛竹に似て至て少さく、高さ僅に一尺許に過ず、葉は淡綠にして薄く、光澤ありて、葉の先すべて下垂するものは、此竹の天稟なり、又一種櫻櫛竹あり、漢名を短柄といふ、その葉幹また大櫻櫛竹に似て、高さ僅に二尺許に過ざるを異とす、近時別に一種觀音竹といふものあり、其葉厚して大櫻櫛竹に似て、よりも潤く、色深綠にして、葉先下垂せず、幹最肥大にして毛あり、其幹三五年をふるものは、大櫻櫛竹とおなじく、梢の葉間に穗をなし、華をつく、狀及己華に似て、はじめ淡黃色にして、後白色に變じ、また根上より毎幹おののく筍を抽て、叢生恰も枝の如し、これ尋常の櫻櫛竹に異なるところなり、思ふに此種は杜臺卿の准賦にいはゆる檳榔竹にてもあるべきにや、

〔倭名類聚抄二十一〕 筒 唐韻云、筒俗用去聲、竹名也、